学生研究レポート

土粘土による塑造表現の追求

――制作と展示の機会を得て――

中島　大介*　　四方　　誉**

1　土粘土と彫刻

大学入学後、1 年次から造形表現や図工科目の授業を多く受講してきたが、3 年次に初めて自身の興味に沿った「モノ作り」を本格的に行った。3 年次の前期では、木を主素材とする手押し車の制作を行った。自身の想定や考えが具体的な形になる過程が楽しく、モノ作りに熱中した。そして後期では、一転して純粋美術の一つである「彫刻」制作に取り組みたいと考えた。動機は 2 つあり、1 つは前期と別分野の制作に取り組みたいと考えたこと、もう 1 つは土粘土に触れてみたいと考えたことである。

初めて土粘土に触れた際は、土が水分を多く含むときの感触と、水分量が少なく固いときの感触に大きな違いを感じ、ここに新鮮な感動を覚えた。併せて、養生により乾燥を防ぐことで何度でも使用できる点や、これとは逆に、あえて固めることで長期保存できる点に実用性を感じ、教育現場でも扱うことのできる魅力ある素材のように思えた。

制作においては、土粘土をバランスよくつけることに難しさを感じた。また、お互いの顔をモデルに据えてじっくりと観察しながら粘土をつけていく中で、視覚的に認知している形と、手で表す形との乖離が大きいように感じ、目と手がいかに連動していないか、あるいは、普段いかに見ているようで見ていないか、ということを改めて知る貴重な機会となった。しかし制作を進めるうちに、自身が納得できるまで何度も造り直せることや、細部まで詰めた造形を行うことができる点に大きなやりがいを感じた。

2　制作過程

制作は、筆者同士の顔をお互いのモデルに据えることから始まった。まず、お互いの写真を 8 方向から撮影し、次いで、鉄の支柱をベニヤ版に固定し、その鉄に角材を結び付けて芯棒とした。そして、この芯棒に土粘土をつけていった。初めは顔の体積と同量の粘土を用意し、目や鼻や口を排した単純な形（球状）を想定して芯棒に粘土をつけた【写真 1】。その過程を経て、徐々にモデルの特徴を捉えていく。その際は、顔に正中線を引き、バランスよく土粘土をつけていく【写真 2・3】。しかし人間の顔は厳密には左右対称ではなく、左右で少なからず違いがある。その違いを探るべく写真を見ながら徐々に形をモデル

*教育学部 4 回生
**教育学部 4 回生

写真 1　（中島作）

写真 2　（四方作）

写真 3　（中島作）

写真 4　（中島作）

写真 5　（四方作）

写真 6　（四方作）

に近づけていった。また正面から見るだけではなく、角度を変えながら何度も粘土をつけた。大まかな形ができたら、より細部の造形を行うために扱う粘土の量を減らした。この段階から、写真の使用を辞めた。交互にお互いを観察し、写真では分からなかった細かな凹凸を実物から見つけ、より厳密な形を追求した【写真 4・5・6】。粘土原型が完成したら、材質転換を行うため、型取りを行った。転換後の素材は切削による造形が容易な石膏とした。型取りの過程は次の通りである。まず石膏雌型を作り、次いで粘土を掻き出す。更に雌型に離型剤を塗布した後に石膏雄型をつくり、最後に石膏雌型を割ることで、材質を粘土から石膏に転換した。この型取り後は、面を意識し、石膏を金ヤスリで削る作業を繰り返し、一応の完成とした。なお、芯棒の制作から石膏原型の完成までにはおおよそ 4 か月の歳月を費やした。

3　日本彫刻会展への出品

拙作は第 48 回日本彫刻会展（於：東京都美術館）へ出品し、僭越ながら入選という結果を得た。日本彫刻会展は日本最大級の彫刻の展覧会であり、日本初の公立美術館の系譜を辿る東京都美術館で開催された。

大阪大谷大学の図工室で生まれた作品が、長い歴史を有する美術館に展示されたことを素直に嬉しいと感じた。しかし同時に、作品が作者の手から離れ、その価値の判断が完全に鑑賞者に委ねられることの厳しさについても肌で感じることができた。

4　様々な表現に触れて

日本彫刻会展には様々なテーマの作品があり、人体はもちろん、恐竜や、架空の生物のようなユニークな作品も見られた。また一言に「人体」と言っても、例えば骨格を意識した作品、あるいは面を強調した作品、さらには丸みのあるフォルム等、同一のテーマにも関わらず一つとして同じ形はなく、どの作品にも異なる魅力があるように感じられた。この価値観はまさに教育学部で勉強している内容と重なるもので

あり、筆者が今後教壇に立つ際にも、子どもたちを一括りにせず、それぞれの良さを発見し、それらを大切に育みたいと思う。

美術教育や「表現」という分野が、個性の発見や多様性の受容という点において非常に意義深い活動であることを、自身の彫刻制作や美術館での展示・鑑賞を経て強く感じることができた。

5　おわりに

本研究を通して、人体彫刻では骨格が形の土台となること、即ち基礎・基本が重要であることや、土粘土の魅力的な特性等、今後に活かすことのできる多くの発見や価値観を得ることができた。

筆者は 2 名共に、一つのことに没頭することを苦手としていた。しかし、本研究で数ヶ月にも及び彫刻制作を継続したことに併せて、美術館での展示という経験のない貴重な機会を得たことによって、何か一つのことに没頭すること、継続することの大切さを強く感じることができた。次年度、幼少期からの夢であった小学校教諭として教壇に立つ際には、子どもたちに 0 から何かを創り上げることの楽しさや、奥深さを伝えていきたいと思う。

初めて芸術の世界を覗き、継続や個性の大切さ、そしてそれらを育むことのできる「表現」の素晴らしさを深く学ぶことができたように思う。